

# 自蹊庵便り

令和五年 水無月

NO 162

茶事折々 炉から風炉への誘い

過ぎて逝きます。

儀なく、日曜日十三名、月曜日十三名、火

あゝ、何と早いことか、一日が短くなつてしまったのか、一月という三十日の営みが、まことにまことに早いのです。年齢といふものの持ち時間の切なさ、早く感じさせてしまうのでしょうか。

尊敬申し上げている茶のお仲間九十歳

うべなうばかりにございます。

う、共に難しきことにございます。

を過ぎながらも、遠方よりリュックを背負い、和装で電車を通っておられるYさんの言葉「寝てしまつたら朝が来てしまうのよねえ」と、長年この方と共に恩師の教えを一つでも多くのことを学びたく通い続けている茶友にございますが、私もまたこのYさんの言葉の重みをずしりと、身にも心にも感じ入り、受け止めてのこの頃にございます。

この度のように炉から風炉に至り、障子の入れ替え、道具しかり、庭の枝も伸び放題、かつては一人でできていたことも、お人に助けて頂くことも多くなりつつあります。

水屋担当者は炉と同じように三炭調べてスタートしたいのですが、それでは中立ち直前、お菓子の前に炭手前ということでは。本席の人数も多く、炭手前の頃は消えていることでしょう。悩ましくむずかしき。初風炉の炭つぎにございます。

この五月、京都は大徳寺餘慶庵での端午

こうして少しずつ、お人への依存度も増しつつ、年齢というものと向き合っていくの茶事においては、コロナの緩和も手伝つてのこともあり、徐々に席入り十名越え余

取り合わせにしてしまい。よって風炉釜は小振りのものに。配慮の足りぬ不手際な道具合わせになつてしまい水屋担当の方には

まことに思いの半分も、いえく十分の一

もこなせずさらさらと一日、一月、一年が

具合わせになつてしまい水屋担当の方には

もこなせずさらさらと一日、一月、一年が

もこなせずさらさらと一日、一月、一年が

もこなせずさらさらと一日、一月、一年が

御苦労をおかけしてしまいました。

控え釜の湯も充分にあさから整えておき、炭を足し添え足し添えするも、連日初夏を越え、真夏日のような日が続く中で茶事にございます。

台所の煮炊き共々、余分な火や湯気、部屋を温めすぎぬよう使用した冷房も日がな一日かけていたのでは、漆器類も気がかりなになり、湯気立つ湿気の強い処での濃茶、薄茶をはくことさえ気にかかります。台所方、水屋方も、着物での所作、働きにございます。

余分な炭つぎのなきよう、程良く間に合うよう、雑炭も充分に足し添え、足し添え、緩急宜しく調えることが出来、熟知するには、間に合う仕事ができるよう誘導する。通り一遍の炭手前なども見事に裏切られ、その場に合った生きた茶事をする事、場数の智恵のいることにごさいます。

気働きの連続、そしてチームプレー、一つとして気の抜けない裏方の働きなれど、

席中からは終日和やかな笑い声が聴こえて

おり、障子や襖ごしに伝わりくる、楽しそうなお声に助けられながら、裏方での不手際が、席中に空気伝染せぬよう、皆々一所懸命勤めてくれました。

そう、ここが大切なのです。どんな不手際もアクシデントをも、すみやかにさりりと智恵を出し合って、お席中に気配を感じさせぬよう、満足してお帰り頂けるよう、一願となつて一席を調える。毎日の裏方のスタツフ、お人も変わる中でのチームプレーにございます。

そこには、昔ながらのよく云われているところの三人寄れば文殊の知恵というものもございましょう。でも、いつも思うことなのですが、その前手に、智恵以上に大切なもの、皆さんの心映えの優しさがあります。その時どうする…という突発的な失敗も、先ずはみんなの優しさとチームワークで急場をしのぎ、そして知恵を出し合う、この心映えの鍛錬の連鎖の賜物にございま

す。

この度の京都の茶事においては、主力メンバーが二人も欠けるというアクシデントもありながら、台所方の役目、水屋方の役目、皆々余年なくよくよく勤めてくれました。終わってみれば一つ一つ智恵というデーターの宝物を一杯積まれたことにごさいます。私こと、亭主も今少し、皆様の働きに背中をそつと温かく押せる程の技量を、自らに育てていきたいものです。

端午の節句の有職飾りの道具、菓玉の画賛など、いつも快く御協力くださる皆様のお陰で、この度も亭主の技量不足を助けて頂きました。杜若の固い蕾の花結界も一輪開き、二輪、三輪と開きつつ、三日目の終わり頃には満開になり、窯の湯気のそばでよく三日間持ちこたえてくれたものです。時間と云うものの馳走の有り難さの身に染みた一席くにごさいました。遠方より御来駕賜りました皆様には篤く御礼申し上げます。